

# 小板橋

石上露子をい  
る集 2017. 5. 18  
= 代表者章 =  
= 顧問・編集者 =  
= 事務局・編集者 =  
= 大石照子市  
富田林市  
津山台 1-18-15  
0721-29-1576

## 第一九回 定期総会

八方を塞がれ術なき蜘蛛の姿吾とかさなり  
いねがたき夜 (芝昇一遺詠)

代表 宮本 正章



題名としました短歌は前代表の芝昇一氏の平成九年の作品です。今度の第一九回定期総会前後に私を夜毎襲っていた現実です。

下に、総会では会を存続すべきか、否かを一人一人述べていただき、採決の結果、過半数で「解散」に決しました。会員の方々にそう結論させたのは、代表たる私のこころ、三年の会の運営の不振、リーダーシップのなさがあると云われても仕方ありません。私が解散を考えるに至った経緯については、見苦しい自己弁護になりますから述べませんが、私に知恵と勇気がありましたら、事態は変わっていたかとも思います。今、眼前に芝氏の温顔が浮かびます。「いくばくの生の証」(遺詠平成十二年)として残された会を潰すことに、私は幾度も幾度も、氏にお詫び致しました。会を閉じるにあたって、約一八年間の会の歴史をふりかえってみたいと思います。

会の名称が決まったのは、平成十一年(一九九九)九月の芝氏主催の露子研究会(寺内町センター)であつたらしい。○同年一〇月九日「石上露子を語る集い」の発会式とシンポジウムが市公会堂で行われ、ここで、私は松本和男氏・碓田のぼる・木村勲と云う露子研究の大先輩に会いました。○平成一五年六月八日、石上露子歌碑が本町公園に建立され、盛大な除幕式が行われました。○平成一六年二月八日、「石上露子歌碑建立記念の集い」があり、碓田のぼる氏の講演があり、後、碓田氏・芝・宮本で鼎談をしました。○平成一九年六月一〇日、芝氏逝去(於 PL 病院)・享年八四歳。氏は家業(呉服商)の合間に、歌を詠み、エッセイを執筆し、露子研究に励む人でありました。○平成二〇年八月一〇日、芝昇一遺稿集『ひたに生きて』を刊行。○平成二一年(二〇〇九)一〇月八日、高貴寺(河南町平石)に建立した露子歌碑の序幕式を行い、同一二日、市公会堂で「石上露子没後五〇年記念の集い」を開き、露子短歌の独唱と松本和男氏の講演「石上露子と司馬遼太郎」がありました。例会で行ったことや露子生誕祭での講演については省略致します。以上がわれわれの会の簡単な活動の軌跡です。

どうかみなさん、会は解散しましたが、今後も石上露子文芸に親しんでいってください。最後に十年にわたる私へのお力添えに感謝いたします。ありがとうございました。

## 十九回 定例総会結果報告

顧問 萬谷 順一



新緑も爽やかな五月晴れの五月十四日、「石上露子を語る集い」第十九回定期総会が富田林市立中央公民館で開催されました。午後一時三十分すぎ、会員が出揃い司会の私が開会を告げ、まず宮本代表の挨拶がありました。

宮本代表から「今日を最後に代表を辞任し会員を辞めることになった」との前置きの言葉があり有意義なご挨拶がありました。

次いで総会の議長に久保氏を選出し、久保氏は、本日の会員総会総数十七名、出席十五名、欠席二名いずれも委任状の提出があり、総会は成立する旨をのべ議事に入られ、平成二十八年度活動報告、一般会計決算及び特別会計決算と会計監査報告の審議を無事に済ませ次の議案、会の今後について、を上程された。これについては先月の例会で宮本代表から、「私も高齢となり体調も良くないので会長を辞めたいが後任もきまらないので解散したい考えを表明され、来月皆さんのご意見をきいた上でどうする決定したい」と述べておられることに従い、議長から「石上露子を語る集い」の存続か、解散かについて皆さんのお考えを聞かせてくださいと提案があり、順番に、それぞれの考えを述べました。充分発言の時間をとつたあと、会の存続か、解散かの採決を行った結果、解散する人が過半数を占め、会は解散と決定した。

おもえば、芝代表八年、宮本代表十年の十八年間続いた会であつたが、有終の美をのこして本日幕を閉じることになった。この四月号をもって百九十号となった機関紙「小板橋」を手にして、その内容の豊かさに驚きを感じるとともに、併せてここまで至つた多くの人々の協力と石上露子顕彰への努力の結晶に敬意を表したいと思つていきます。

幕を閉じる会として、後に残つた故松本和男先生からの寄贈本と積立金を処理するための清算委員会を設けることと、旧役員がこれに当たることを決定しました。未完成となつた仮称石上露子文学記念館については、今後を市へお願いする外方法がないのでそのような考えをもって清算することとなりました。

今日までの長い間、なみなみならぬご協力を賜りました関係皆様方へ心から厚く御礼申し上げますとともに深く感謝申し上げます。誠に有難うございました。

機関紙「小板橋」もこの一九一号をもって終わらせていただきます。永らくのご愛読有難うございました。

富田林の六月は  
芸術と文化の彩り

第7回  
石上露子  
生誕祭

平成29年  
6.10 (土)

生誕祭セレモニー 11:00~11:30  
白山家住宅 入場料 ¥400-  
お茶席(立礼式) 11:30~14:00  
お茶席 ¥400- 入場料 ¥400-  
文学講演会 14:30~16:30  
田中実住宅 入場料 ¥0- 入場無料  
黄昏コンサート 18:00~19:30  
白山家住宅 入場料 ¥0- 入場無料

主催 石上露子生誕祭実行委員会  
共催 富田林市教育委員会

実行委員会  
一般社団法人 露子会  
富田林市本町分室 千ヶ丘1-1 1F  
TEL 0721-29-2771

生誕祭セレモニー  
11:00~11:30  
場所 白山家住宅 白山家住宅  
土曜よりご来賓いただけます。  
※ 会場・楽屋の伝統的装束  
類かな等が準備される中、露子を懐  
念し、お話を伺い、お話を聞きます。

お茶席  
11:30~14:00  
場所 白山家住宅 中興  
実やかなお茶席で中興的な  
お茶席をお楽しみください。  
お抹茶 お菓子代 ¥400-

文学講演会  
14:30~16:30 (受付 14:00~)  
場所 田中実住宅  
北澤記子(文学研究家・小説家)  
区講演(鶴島、露子とて露子)  
区講演(神戸松本女子学院大学文学部教授)  
区講演(田中実住宅)  
入場無料 定員 50名

黄昏コンサート  
18:00~19:30 (開演 17:30~)  
場所 白山家住宅 土曜  
入場無料 定員 50名

露子月間  
五月二十日(土)「今宵は」優秀作品展  
五月二十一日(日)「今宵は」優秀作品展  
五月二十一日(日)「今宵は」優秀作品展  
五月二十一日(日)「今宵は」優秀作品展  
五月二十一日(日)「今宵は」優秀作品展

## 芝先生の秀歌五首

いただきを雲にかくしてよこたはる金剛山凝視むる病院の朝

平成八年三月

モノクロに塗りつぶされし青春か菊と刀におびえたる日日

平成八年八月

しるがねの織き針をす秋の雨水面に霧の湯き立ち上がる

平成九年四月

かりそめの病ひにふせば病むことも生きの証と思ひ諾ふ

平成十一年一月

めぐり来し春爛漫の花の下いまうつそみの生命あたたむ



# 露子と宇治十帖と 仏教思想(主に法華經)の一考察(二)

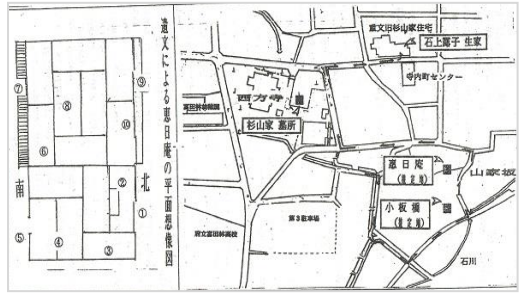
会員 久保満夫

## 露子と仏教思想

### 「恵日庵」

尼衣念ぶつながらにわがわがくこころかなしきこほろぎの家  
念仏三昧に世をすね暮らしたと云はるゝ石川畔の小家は、それは庵室と云ふよりは香をたき文をよみ人を思ふによい山荘とこそよびたい。…仏像をもとめて持仏堂を、閑伽水用の井戸も掘らせるなど『石上露子集』松村緑編 中央公論新社)と、「恵日庵」では、念仏三昧に仏像を求めて、持仏堂を閑伽用の井戸を掘らせるなどの構想があったと考える。

露子は、好んで鈍色の衣を着ている。正平との恋が結ばれず、尼衣を着て、念仏を唱えている尼僧のようなものと詠んでいる。



「恵日庵」平面想像図  
(平成12年小板橋第四号より)

なつかしの京の鐘の音、上賀茂のほとりちかく、のちは銀閣寺の畔、せゝらぎのひびきにまぎらひてきくにし大谷の中の谷、代々のみはかのまへに日ごとの様にお父様とよびかけて、今こそ流るゝにまかす涙のいくすぢ。

身もこゝろも病みつかれて(前同)。

杉山家の墓地は、浄土宗西方寺(富田林市)にある。京の西大谷は、露子が二人の息子の進学のときに女中一人を連れて住居を京に移した。その時によく墓参に訪れた(親鸞の本願寺発祥の地)。

杉山家の菩提寺は、興正寺富田林別院である(真定)。後の一基は高貴寺にある。(露子が次男好彦の三回忌に建立)。河南町平石にある。好彦は、静寂な山寺、高貴寺をこよなく愛して一人で、よく来たという。露子は、母子三人の永遠の住処に選んだ(律宗から改宗し、真言宗)。『ひたに生きて』芝昇一遺稿集 石上露子を語る集い編より抜粋)。

昭和二十一年十二月三日、露子は女中のカヨを伴って富田林の旧宅へ帰った。形見の家は荒れるに任せ、軒も朽ち、柱もゆがみ、物の怪なども住みそうな家の片すみのいろいろの灰は冷えたままだった。

気位の高い露子は、老女中一人を支えに人の世の秋の終りの虫の音の節の哀れを聴きながら、その晩年を過ごした(『石上露子文学アルバム』 松本和男編)。



露子歌碑(高貴寺)

露子の人生を考えると、自伝「落葉のくに」恵日庵で、親の取り決めた結婚という悲しい気持ちと正平との結ばれぬ悲恋を思って、念仏を唱えている尼のようなものと詠っている。「思ふかな宇治の

巻なるかの君に似たる宿世」と、わたしの薄幸な過去(宿世)と余生は、「浮舟」に似ているという。

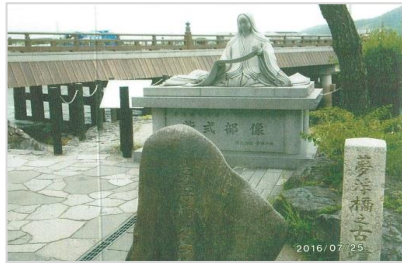
晩年の和歌で、「人の世の旅路のはての夕づく日あやしきまでも胸にしむかな」と詠んでいる。わたしの人生は、旅路の果ての夕日のあやしいまでの美しさに惹きつけられて、心に深くしみいると歌っている。波乱万丈の劇のような人生であったが、最後まで愛執に苦悩した露子は、ひとり超然と生きるなかに、「孤高の人」ともいわれるように、華やかな美しい人生のロマンを求めていたと私は思いたい。

人生の四苦(生老病死)の苦悩の大海にあつても、愛別離苦、怨憎会苦(怨み憎んでいる者と会う苦しみ)、求不得苦(求めても得られない苦しみ)五盛陰苦(肉体・精神上の苦の総称の五陰が盛んであることから起る苦しみ)など、仏教思想の四苦八苦の苦悩を露子は短歌や美文等の文学に生かした人であると考えられる。

寺内町の地域の伝統的行事、宗教的儀礼、杉山家や河澄家等の親戚関係による代々のお墓参りなどの生活環境の中で、育まれた露子。彼女は、幼少期から仏教思想になじんできたと考える。また、古典や『源氏物語』など、王朝文学に親しんでいたから、法華經思想を知る機会があつたであろうと考える。

### 夢浮橋への思い

薫は、浮舟の死を知り、わが宿世の拙さを嘆いて「かかるとの筋につけて、いみじうもの思ふべき宿世なりけり、さま異に心ざしたりし身の思ひの外に、かく、例の人にてながらふるを、仏なども憎しと見たまふにや、人の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便は、慈悲を隠して、かやうにこそはあなれ」と(蜻蛉)。自分は、男女の道につけて、ひどく悲しい思をしなければならぬ宿運だった。道心を起こさせようとして仏のなされる方便は、慈悲をお隠しになって、このように苦しみを与えになるのであると、ただ勤行ばかりしている薫である。また、



54帖夢浮橋(ゆめのうきはし)

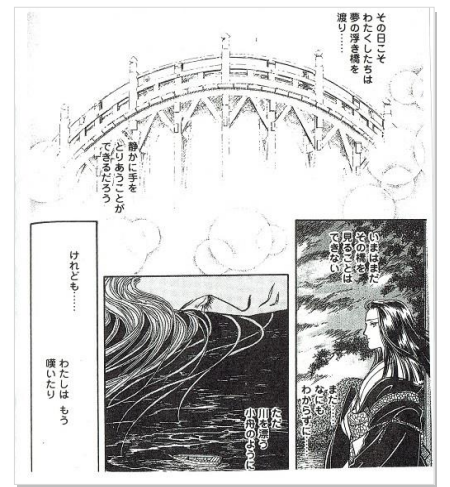
法の師とたづぬる道をするべにて思わぬ山に踏み惑ふかな  
僧都を仏法の師と思つて山道を分けて訪ねてきたが、その山道があなただけ(浮舟)のところに導いてくれる道となつて、わたしは思いもかけない恋の山に踏み迷つていくという(夢浮橋)。

浮舟は、死を決意し、匂宮の文殻を処分する。「昔は、懸想する人のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてただにこそ、身を投ぐるためしもありけれ」と、昔は、懸想する思いがはずれも優劣のつけられないのに思い悩んで、そのことだけでさえ川に身を投げる例もあつたと、(浮舟) 万葉集の三角関係を思い出している。例えば万葉集の真間手児名・菟原処女や桜児など、二人の男の板挟みとなつて入水、あるいは経死した女の伝承は少なくない。浮舟は、匂宮、薫との関係により、高貴な男性二人に板挟みとなつて不貞を犯し、世間の笑い者になるのでは、とうてい生きてはおられないとの気持、苦悩から、死を決意する。

人生の「はかなさ」を、思い知る浮舟は、「鐘の音の絶ゆるひび

きに音をそへてわが世尽せぬと君に伝えよ」と詠んでいる。ここには、あの誦經の音が消えてゆく響きにわたしの泣く音をそえて、わたしが死んだと母に伝えてほしい。そして、いつか、きつと薫と逢い、夢の浮橋を渡り、静かに手をとりあうことができるといふ浮舟の想いがある。

私は、尼となつた浮舟が霧に包まれた川もやがて晴れやかな空の下に出るよう、幸せの夢の浮橋を渡つていくであろうと思いたい。



コミック「あさきゆめみし」  
(大和和紀著)

①露子と宇治十帖については、短歌「浮舟」に詠まれているように、浮舟の宿世とのこころ命、余生まで似通っている。正平との身を焼くような恋、夫との形ばかりの生活に苦しんだ結婚生活(愛別離苦・怨憎会苦)。その苦しみを、美文や短歌に生かしたと考える。

②宇治十帖と仏教思想については、阿弥陀經、往生要集、大般涅槃經からの引用もあるが、「総角」での不輕(不輕菩薩品)、「手習」での竜女(提婆達多品)の仏教説話をはじめとする妙法蓮華經に典拠をもつものが、圧倒的に頻度が高く、法華思想が反映されている。作者紫式部の法華經の習熟度は高いと評価できる。

法華經でしか説かれていない竜女成仏(女人成仏)は、すべての女性が幸福境界を確立する道を明かしていると考えられる。

③露子と仏教思想については、「恵日庵」で、念仏三昧に仏像を求め持仏堂や閑伽水用の井戸の構想まであつた。好んで鈍色の衣を着、自身が尼衣を着て、念仏を唱えている尼僧のようなものといっている。

寺内町の伝統的行事や宗教的儀礼などを通じて、幼少期から仏教思想になじんでいた。『源氏物語』など王朝文学などからも、法華經思想の影響があつたであろうと考える。

④宇治十帖の最後の巻の夢浮橋で、人生の「はかなさ」を思い知る浮舟の出家後の説経が法華經といわれている。宇治十帖に関わる人々の苦悩・恋愛・嘆きなどの心の拠り所として仏教思想・法華經思想の影響があつたと考える。尼となつて浮舟は、夢の浮橋を渡り、薫と逢い、手をとりあつていきたくいという想いがある。霧に包まれた川もやがて晴れやかな空の下に出るよう、二人は夢の浮橋を渡つていくであろう。

### おわりに

法華經壽量品第十六に、「衆生所遊樂」の一偈がある。人間は、現世に楽しむために生まれてきたと説いている。人間は苦しむため、宿世に泣くためにこの世の中に生まれたのではないと考える。

最後に、宮本代表より種々のご指摘賜り感謝申し上げます。

『源氏物語』で宇治十帖は、大変、仏教色が強く出ており、作者が異なるのではと云う説の一つの根拠があると思えます。…(テーマの) 試みは、まことに壮大なものだと考えます。…「宇治十帖」は露子の思い入れの濃い巻です」とのご指摘に感謝します。大石照子氏はじめ、「石上露子を語る集い」の諸兄諸姉のご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。